

# ヨーロッパ諸国の海外植民地における 都市計画の展開についての研究

山田 耕治<sup>1</sup>

<sup>1</sup>日本工営株式会社コンサルタント海外事業本部 チーフプランナー

(〒102-853 東京都千代田区麹町5-4)

E-mail: [yamada-ko@n-koei.jp](mailto:yamada-ko@n-koei.jp)

本研究では、ヨーロッパ列強による植民地支配を背景に、宗主国が主導して建設された植民地の都市計画について概観し、その特性を分析するとともに、植民地の都市計画のモデルを明らかにする。都市計画モデルには不整形モデルとグリッド・モデルがみられ、後者には正方形型、長方形型、グリッド・ダイアゴナル型の3つのサブモデルが見出され、相互に影響しつつ展開したことが明らかになった。

**Key Words :** Colonial City, Planning, Portugal, Great Britain, France, Spain, Netherlands

## 1. 研究の背景と目的

15世紀半ばにヨーロッパ諸国が船隊を連ねて新大陸への航海に成功したことにより、ヨーロッパ列強による海外の植民地支配が始まり、20世紀中ごろに多くの植民地が独立するまで続いた。

本研究では、ヨーロッパ列強による植民地支配を背景に、宗主国が主導して建設された植民地の行政やサービスを担う都市（植民都市）の都市計画について概観し、その特性を分析するとともに、植民都市の都市計画に関する今後の研究の基礎を固めることを目的とする。

本研究の対象期間は、15世紀末から、多くの植民地が独立を果たす20世紀中ごろまでとする。

## 2. 研究の方法

本研究では、ヨーロッパ諸国の海外植民地における都市計画の潮流を明らかにするため、大航海時代以降、世界各地で展開された植民地における都市計画の歴史を概観する。対象は、ポルトガル、スペイン、オランダ、フランスおよびイギリスの5カ国とし、アフリカ、アジアおよび南北アメリカでの状況を幅広く概観する。その上で、植民都市の都市計画を分析するツールとして、植民地の都市計画の空間的な特性をとらえるモデルを明らかにし、立地条件や宗主国の特性、技術などとの関連を検討する。

## 3. ヨーロッパ列強の植民地の都市計画の歴史

本章では、ポルトガル、スペイン、オランダ、フランスおよびイギリスの植民地における主要な都市計画について概観する。

### (1) ポルトガル植民地の都市計画

#### a) アフリカ

大航海時代が始まる15世紀末、ポルトガル人がアフリカ西岸を南下し1486年にケープタウン（現・南アフリカ共和国）に至り、さらには1488年にアフリカ大陸南端の喜望峰に至り、さらに1497年にバスコ・ダ・ガマの船団が喜望峰を経由してインド洋に面する町マリンディ（現・ケニア）に至る<sup>1</sup>。ポルトガルは通商の拠点としてモザンビークを支配下におき（1500年ころ）、さらにアフリカ東岸の港湾都市であるザンジバル（現タンザニア）、モンバサ（現ケニア）やマリンディ（同）を16世紀後半に支配した<sup>2</sup>。

次項で述べるように、ポルトガルは喜望峰を経由したアジア航路を開拓し、その寄港地・補給地としてモザンビークやケープタウンなどの都市が成長した。

#### b) アジア

バスコ・ダ・ガマは、アフリカ東岸からインドに到達した。ポルトガルは、1503年にコーチン（現・インド）を占領し、アジアで初めてのポルトガル植民地とした。さらに1510年、ポルトガルはゴア（現インド）を制圧し、1530年にアジアの全植民地を統治するポルトガルのインド総督府をコーチンからゴアに移し、港につながる広い公共広場を中心に大聖堂や修道院、総督の宮殿などの主要な建物が配された（図1）。ゴアとリスボンの間には、喜望峰経由の定期航路が開かれた<sup>3</sup>。

1513年、ポルトガル人が中国本土のマカオに初渡来した。その後、1557年にはポルトガルは明国政府から居留権を得て、マカオは中国大陸における初めてのヨーロッパ人居留地となった（図2）。

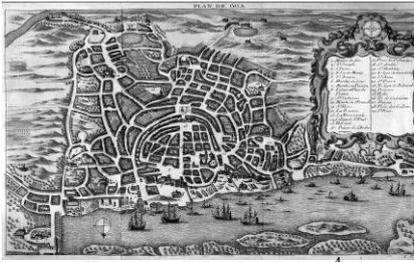


図1 ゴアの地図 (1750年)<sup>4</sup>



図2 マカオの港と都市 (1765年)<sup>5</sup>

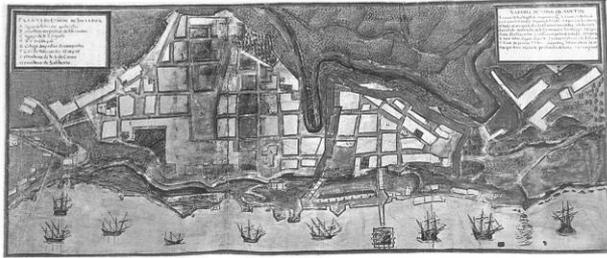


図3 サルバドル・ダ・バイアの都市と港 (1612年)<sup>6</sup>

次にポルトガルは日本に接近し、1550年には九州の平戸にポルトガル船が入港した。ポルトガル人は日本でのキリスト教の布教に力を入れ始めたため、豊臣秀吉は1587年、宣教師追放令を出し、長崎を直轄領とした。さらに江戸幕府は1614年にはキリスト教を禁止した。幕府は長崎・出島に外国人を閉じ込めて管理した。ポルトガルはマカオと長崎を結ぶ南蛮貿易によって膨大な富を得たが、1634年には幕府によるポルトガル船の入港禁止令により南蛮貿易は終止符を打たれ、ポルトガルによるアジア植民地形成も終わりを迎える。

### c) アメリカ

ポルトガル人は1500年に南アメリカ東岸に到達した。1532年以降は、現在のブラジルにおいてポルトガル人の居住が始まり、1549年に首都サルヴァドル・ダ・バイア（現・ブラジル）が建設された（図3）。

## (2) スペイン植民地の都市計画

### a) アメリカ

コロンブスによるアメリカ大陸への到達（1492年）がアメリカ大陸におけるスペインの植民地形成の端緒となった。1494年、スペインとポルトガルのあいだにトルデシヤス条約が結ばれ、スペインはアメリカ大陸における征服の優先権を認めら、これにより中南米のスペイン植民地化が進展する。

1519年、スペイン人のエルナン・コルテスはメキシコに上陸し、1521年にアステカの首都である水上都市・テノチティランを攻略し、破壊した。スペイン人は同じ場所に町を建設した（図4）。これが現在のメキシコ・シティ（現・メキシコ）である。

ペルーでは、1533年にフランシスコ・ピサロがインカ王国に到着し、インカ王国の皇帝を急襲し人質とし、

ピサロの一行は王国の首都クスコに入場する。1542年にペルー副王が創設され、1549年にはリマがペルー副王の首都となった（図5）。これにより、リマはスペイン領植民地の中心的な場所となった<sup>7</sup>。

18世紀に入ると、スペインは王位継承戦争に敗れ、国力の低下が目立つようになり、南アメリカでも植民地貿易の権限をイギリスに譲らざるを得なくなった。国力を立て直しのため植民地の改革が行われた。1717年にはペルーの北側、現在のコロンビア、ベネズエラ、エクアドルを含む地域をペルー副王領から切り離し、ヌエバ・グラナダ副王領とした。首都はサンタフェ（現・コロンビアのボゴタ）に置かれた。また1776年には、アルゼンチンを中心に、パラグアイ、ウルグアイ、ボリビアを含むひろい地域が、リオ・デ・ラ・プラタ副王領として独立した。首都はブエノス・アイレスに置かれた<sup>8</sup>。

19世紀の初めになると、ナポレオン戦争で本国が混乱するなか、イギリスによる政治的独立の支援もあり、中南米では植民地の独立が相次いだ。

### b) アジア

マゼランの艦隊は南アメリカ大陸の南端のマゼラン海峡を抜けて太平洋を横切り、1521年、フィリピン諸島に到達した。

1571年、スペインはマニラを占領し、1590年、マニラにイントラムロスと呼ばれる要塞都市の建設を開始した（図6）。その建設には300年近くが費やされ、完成は1872年であった。マニラは、中南米のメ銀を輸入し、東南アジア各地や中国（清）の産物をラテンアメリカに輸出する中継貿易の拠点として栄えた。こうした交易を背景に18世紀にはマニラの市街地はいっそう拡大した。

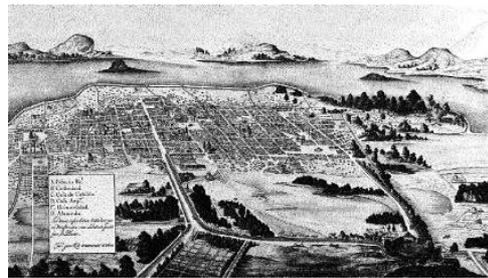


図4 メキシコシティの眺望 (1628年)<sup>9</sup>



図5 リマの計画 (1744年)<sup>10</sup>

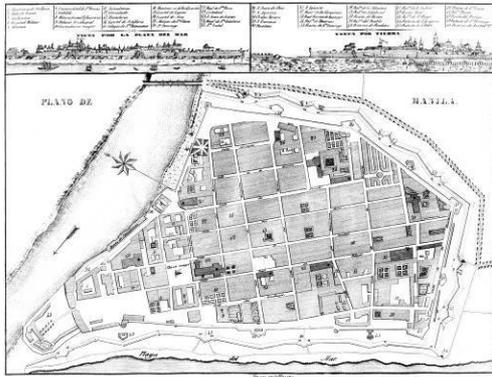


図6 マニラの中心部イントラムロス地区 (1851年)<sup>11</sup>

### (3) オランダ植民地の都市計画

#### a) アジア

1602年、オランダはアジア交易を目指す会社を統合し、<sup>12</sup>オランダ東インド会社（正式には連合東インド会社、VOC）を結成した。最初のオランダ東インド会社の船団は1603年にジャワ島のバンテンに到着したが、先行していたポルトガル勢力とぶつかったため、さらに東に移動した。オランダはこの地をバタビアと呼び、1619年総督クーンの指示により都市建設を始めた。バタビアはチウレン川の河口にあり、蛇行する川に沿った低地であったが、オランダは河川を直線化して干拓（図7）し、バタビアを建設した（図8）。バタビアは現在のインドネシアの首都ジャカルタである。

オランダが次に目指したのは日本であった。オランダ艦隊は1609年平戸に入港し、その後、将軍徳川家康と謁見し、日本中どこにでも入港してよいという朱印状を与えられ、平戸に商館を設置した<sup>13</sup>。オランダは鎖国の例外国として日本に留まることを許されたが、平戸から長崎・出島に移動させられ、活動を限定された。

1622年、オランダ東インド会社は中国本土のマカオの占領を図ったが、現地のポルトガル人が抵抗したため断念した。さらに台湾と中国大陸にあいだの澎湖島を占拠しようとしたが失敗し、1623年に台湾南部の台南に城砦を築城し、ゼーランディア城と命名した。

ポルトガルの対日貿易が途絶える1640年以降は、オランダはヨーロッパ勢としては対日貿易を独占し、オランダ東インド会社は莫大な利益をえた。

#### b) アメリカ

オランダはイギリス人探検家のヘンリー・ハドソンを雇い、北アメリカ大陸に派遣した。1615年には現在のニューヨークの周辺にいくつかの開拓地を設け、1621年にはオランダ西インド会社を設立した。

1614年にオランダ人が毛皮貿易のためにマンハッタン島の南端に植民地を建設した。1626年、オランダ人たちは先住民からマンハッタン島をアルコールなどの物

品と交換し、「ニューアムステルダム」を建設した。この都市は後にイギリスに引き継がれ、ニューヨークと改名され、港湾都市として発展し現在に至る。

#### c) アフリカ

オランダはポルトガル同様、喜望峰航路を利用するため、アフリカに安定した寄港地を求めていた。オランダ東インド会社は1647年、ヤン・ファン・リーベックを南アフリカのケープ植民地に派遣し、これを契機にオランダ人のケープへの入植がはじまり、オランダ本国で困窮したユグノーと呼ばれる新教徒が1688年から翌年にかけて、大挙してケープに入植した。その後も人口は増加し、ケープ植民地は発展した（図9）<sup>14</sup>。

オランダとイギリスは17世紀の後半に3回に渡る英蘭戦争を戦い、オランダの制海権は弱まり、イギリスが代わって台頭した。18世紀末になると、オランダ東インド会社は不振となり、1794年に解散に追い込まれる。

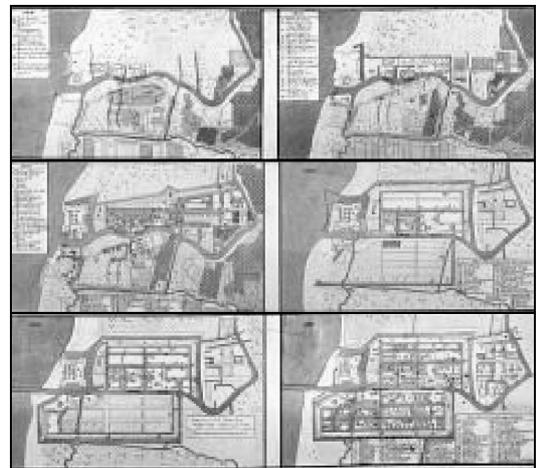


図7 河川改修とバタビアの整備 (1619~1667年、左が北)<sup>15</sup>

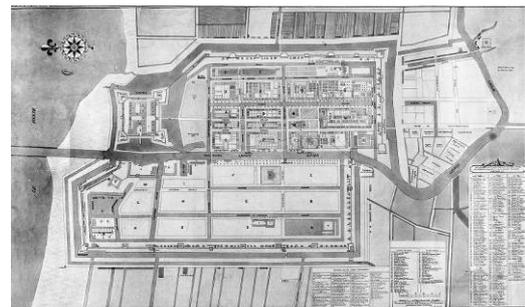


図8 バタビア (1667年、左が北)<sup>16</sup>

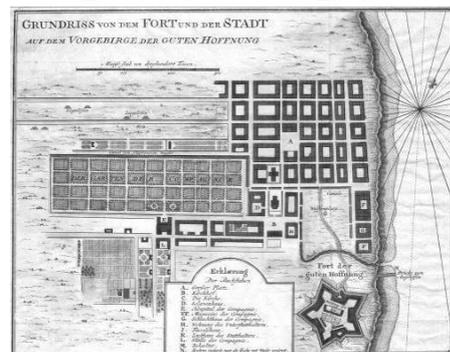


図9 ケープタウン (1750年)<sup>17</sup>

#### (4) フランス植民地の都市計画

##### a) アメリカ

フランスは16世紀前半に北新航路を探すため、探検家を北アメリカに派遣した。これが契機となって北アメリカでいくつかの植民地を領有した。1699年にミシシッピ川流域にルイジアナ植民地が樹立され、1718年にニューオーリンズ(図10)が創設された。

ラテン・アメリカでは、現在のハイチおよびドミニカ共和国のあるイスパニョール島の西側を植民地とした。しかし18世紀末に黒人革命が起こり、1804年にハイチとして独立している。

##### b) アジア

フランスは1858年、宣教師の安全を確保するとの名目で遠征軍を派遣し、ベトナム中部のダナンに上陸、その後サイゴンを制圧し、コーチシナ(ベトナム南部)を植民地とした。さらに、カンボジアを1883年に保護国とし、さらに1886年にはアンナン(ベトナム中部)とトンキン(ベトナム北部)を保護国とし、翌1887年にはこれらを統括する仏領インドシナ総督を設置した。1893年にはこれにラオスが保護国として加わった。

プノンペンでは1925年にフランス人の建築家エブラール<sup>18</sup>が都市計画を策定した(図11)。都市の拡大を見越した大がかりなプランである。特に目を引くのは、ワット・プノムの南側の運河と軸線を合わせるように、新しい鉄道駅を入れたことであろう。この運河は後に埋め立てられ、広い緑地をもつ東西のブルーバールへと変貌する。また、市街地の南のはずれに、大通りが計画された。市街地の中心には、のちにエブラール自らが設計を担当するグランド・マーケットが建造される。

##### c) アフリカ

フランスは1881年に北アフリカのチュニジアを保護国にし、さらに20世紀初頭までに北アフリカ、西アフリカ、中央アフリカと植民地支配を広げた。20世紀に入ってから、モロッコのラバトやフェズ、アルジェリアのアルジェなど、フランスの手による新都市計画がいくつか行われている。

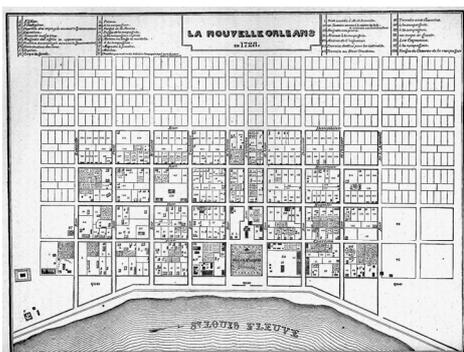


図10 ニューオーリンズの地図(1728年)<sup>19</sup>

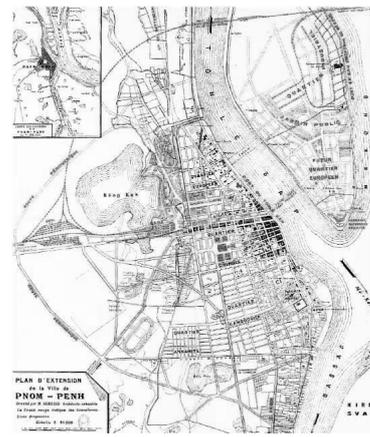


図11 エブラールの1937年プノンペン計画<sup>20</sup>

#### (5) イギリス植民地と独立後アメリカの都市計画

##### a) アジア

イギリスは1600年にイギリス東インド会社を結成したが、あちこちでオランダと衝突しその進路を阻まれた。その結果、イギリスはインドに注力することとなった。

東インド会社は、東海岸にマドラス(現在のチェンナイ)の商館を1639年、西海岸にボンベイ(現在のムンバイ)の商館を1668年、ベンガルのカルカッタ(現在のコルカタ)の商館を1690年に次々と商館を開設した。17世紀後半はイギリス本国でも、インドの綿織物が人気となり、イギリス東インド会社は莫大な利益を上げた。

イギリスが建設した拠点のうちで、早くから発展したのがボンベイである(図12)。インドに設けられた港湾都市の中で、ボンベイはヨーロッパから最も近い場所にある。17世紀後半にボンベイはイギリス東インド会社の海軍基地として栄え、さらに18世紀には造船業の集積地として賑わった。

カルカッタはフーグリー川に作られた港湾とともに栄えた。1717年、ムガル帝国がイギリス東インド会社に対して自由貿易を保障したことで、カルカッタは賑わい、1772年にはイギリス領インドの首都となる(図13)。

トーマス・ラッフルズ<sup>21</sup>はマラッカ海峡に接する小さい島、シンガプーラに注目した。1819年ラッフルズはここに商館を建設した。ラッフルズは、町の名前をシンガポール(Singapore)と改めた(図14)。ラッフルズは、自由貿易港の設置、発展する港に集まる多様な人種の共存、商業を支える教育の重視、100年を見据えた都市建設、欧米の法律の適用などを指示した<sup>22</sup>。

イギリスは1852年の第二次英緬戦争で勝利し、ビルマ南部地域を支配下においた。戦火に焼けつくされたラングーンはイギリス人のモンゴメリー<sup>23</sup>とフレーザー<sup>24</sup>によって新たな都市計画が立てられ、英領ビルマの首都となった(図15)。

1857年にはインド大反乱(セポイの反乱)が発生した。イギリスはこれを鎮圧したが、この事件をきっかけ

に東インド会社によるインド統治に見切りをつけ、1858年に東インド会社を解散し、直接統治に踏み切った。

1911年、イギリスは英領インドの首都をカルカッタからデリーへ遷都した。都市計画はイギリス人のエドウィン・ラッチェンス<sup>25</sup>らに委ねられた。ラッチェンスらは新首都をデリーの市街地の南約5km程の場所に決定し、ここに新たな首都の絵を描いた(図16)。

第二次世界大戦後の1947年にインド・パキスタンが独立し、以後植民地の独立があいつぎ、イギリスのアジアでの植民地支配は終焉をむかえた。

### b) アフリカ

アフリカのイギリス植民地は、東アフリカ(ケニア、ウガンダ)、西アフリカ(ナイジェリア、ガーナ、ゴールドコーストなど)および南アフリカと南北ローデシアなど(ジンバブエ、ザンビアなど)と広域に広がった。

東アフリカでは、1888年にイギリス東アフリカ会社を設立し、東アフリカの交易を支配しようと活動を始めた。イギリス東アフリカ会社はモンバサから東アフリカの内陸に入り、この地域の支配・統治を広げたが、輸出すべき資源に恵まれず倒産した。イギリス政府は植民地を国の管理下におくべく、1894年にウガンダを保護領と宣言、1895年には現在のケニアにあたるイギリス領東アフリカを設立した。

イギリスはその後、モンバサからウガンダに至る鉄道を計画し、1901年に開通した。ナイロビは上記鉄道の中間ほどにあり、その場所は高地であり清涼な気候と豊富な水があるところから、イギリスはこの地を鉄道建設の補給基地とした。最初のナイロビのは1898年、鉄道建設の鉄道技師を務めたチャーチ<sup>26</sup>により計画された(図17)。ナイロビは1907年にはイギリス領東アフリカの首都となった<sup>27</sup>。



図12 ボンベイ (1893年)<sup>28</sup>

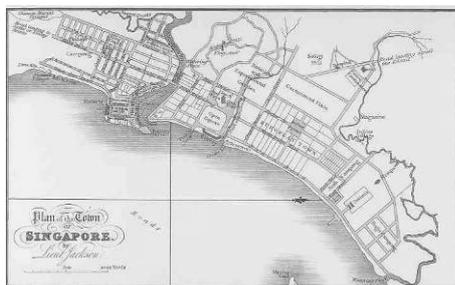
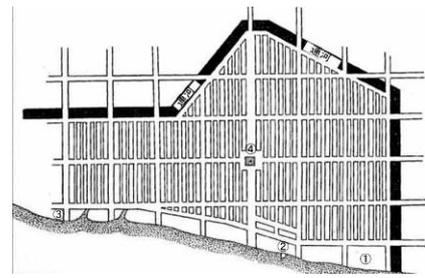


図14 シンガポールのジャクソン・プラン (1822年)<sup>29</sup>



図13 カルカッタ (1842年) (右の緑が要塞、左が北)<sup>30</sup>



凡例 ①公共埠頭 ②税関 ③ゴドウィン埠頭 ④スレー・パゴダ ⑤貯水池

図15 ランゲーン計画<sup>31</sup>

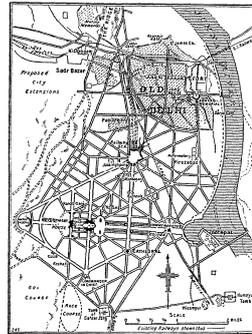


図16 ニューデリー<sup>32</sup>

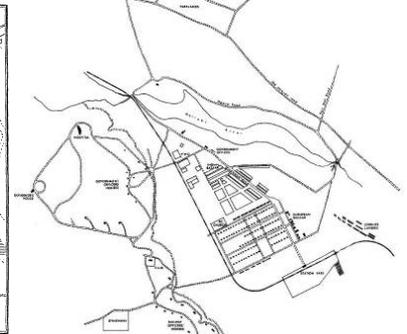


図17 ナイロビの計画図 (1898)<sup>33</sup>

### c) アメリカ(独立以前)

北アメリカでは1607年に最初のイギリス植民地がヴァージニアに設立され、以降、清教徒(ピューリタン)を中心に多数の移民がマサチューセッツ周辺に入植を始めた。ボストンは1630年に築かれ、ニューイングランドの中心都市となった(図18)。18世紀半ばまで北アメリカにおける最大の都市であった。

イギリス国王チャールズ2世はニュージャージーの広大な土地をウィリアム・ペン<sup>34</sup>に与え、1682年、ペン自らが設計し植民地を建設しフィラデルフィアと名付けた。デラウェア川とその支流に挟まれた1200エーカーの長方形の土地の中央に十字となるような大通りを配置し、全体に格子状の道路網を敷設している(図19)。

1669年に新たな植民都市がサウス・キャロライナに建設された。町は川を見下ろす高台に作られ、住宅ごとに郊外に農地が割り当てられた<sup>35</sup>。この町は国王にちなみ、チャールズタウンと呼ばれた(図20、後にチャールストンと改称)。

17世紀のアメリカの主要な都市は、ここで述べたボストン、フィラデルフィア、チャールズタウンに加え、ロードアイランドのニューポートと、オランダの項で取り上げたニューアムステルダム(後のニューヨーク)の5つであった<sup>36</sup>。

1732年にジェイムズ・オグルソープ<sup>37</sup>によって、ジョージアのサバンナにおいて植民都市が建設される(図21)。オグルソープの計画は、中心部には長方形のブロックが集積した居住区が置かれ、郊外には農地が配布された<sup>38</sup>。

また、17世紀に中米・カリブ海の西インド諸島では、

ヨーロッパ列強が競い合うように植民地化を進めた。ジャマイカは1651年にイギリスの植民地となり、大規模な砂糖プランテーションが展開された。後にジャマイカの中心都市になるキングストンは、18世紀初めに測量士のジョン・ゴフ<sup>39</sup>が格子状の都市計画を策定(図22)し、1716年までにジャマイカ最大の町・商業の中心地となった。キングストンの都市計画は、サバンナと同様に長方形の街区を持つ格子状道路網が特長である。

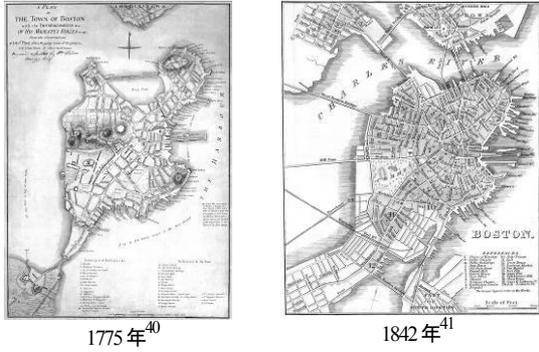


図18 ポストンの市街地拡大

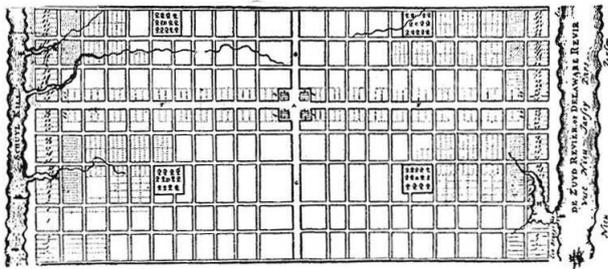


図19 ペンによるフィラデルフィア計画(原図は左が上)<sup>42</sup>

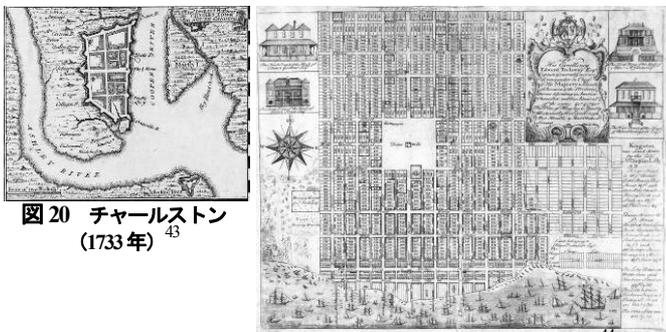
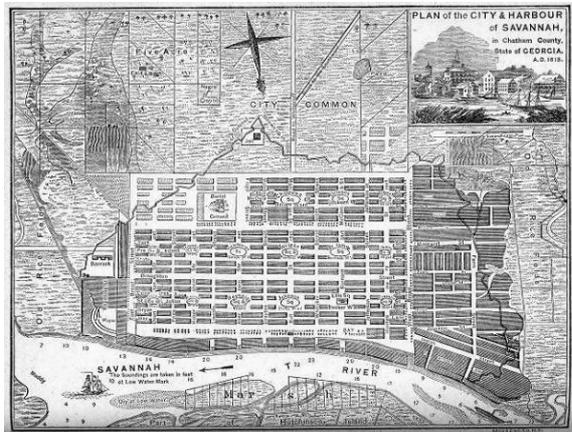


図20 チャールストン(1733年)<sup>43</sup>

図22 キングストン(1745年)<sup>44</sup>



(下方に都市が、上方に農地やコモンが見える。上方南)

図21 1818年のサバンナ<sup>45</sup>

#### d) アメリカ(独立後)

アメリカ合衆国独立後、首都の都市計画を任せられたのは、フランス人のランファン<sup>46</sup>である。ランファンの計画は格子状の道路を基本としつつ対角線方向の放射状道路を加え、交差する場所には広場を設けている(図23)。

ニューヨークでは1811年に測量士デ・ウィット<sup>47</sup>が策定したマンハッタン島全域をカバーする格子状の道路網の計画が正式に採択された(図24)。この計画では、東西方向には、60フィート(18m)幅の通りがあり、そのうち7~10本ごとに100フィート(30m)幅の通りが置かれた。南北方向は100フィート(30m)幅の大通りが16本(後に2本追加)置かれ、長方形街区が数多く並んだ。

アメリカ合衆国独立後、都市形成は西へ向かった。1818年に創設されたイリノイ州は、新たな運河と都市の計画立案を、測量士ジェームズ・トンプソン<sup>48</sup>に委ねた。トンプソンは、1830年、58の正方形のグリッドからなるシカゴの計画案を作成した(図25)。



図23 ランファンの首都計画図(1792年)<sup>49</sup>

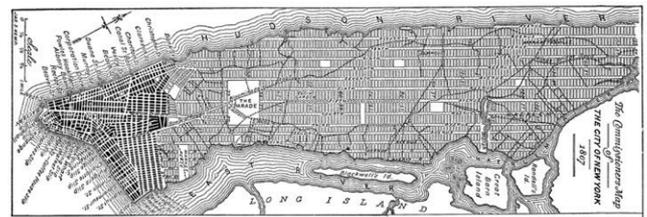


図24 ニューヨーク計画(1811年承認、部分、右が北)<sup>50</sup>



(上が北になるように図を回転した。元図は右が下)

図25 トンプソンによるシカゴの計画図(1830年)<sup>51</sup>

## 4 植民地の都市計画モデル

本章では、植民都市の都市計画についての概観から、その空間特性に着目して2つの類型（モデル）を明らかにし、それらの特性について論じる。

### (1) 不整形モデル

植民都市の第1のモデルを「不整形モデル」と呼ぶ。これは、道路や街区を幾何学的に配置せず曲線的かつ不整形であるものを指す。

#### a) 丘陵地型

大航海時代の初期に形成されたポルトガルの都市には、不整形モデルの都市が多い。首都リスボンの都市図（図26）に見られるように、ポルトガルは都市の立地として丘や谷のある丘陵地を好んだ。丘陵地では、直線的な格子状道路や街区の形成は地形が妨げになって、造りにくく、地形の凹凸に沿って道路を曲げたり、街区を曲線的に形成することが合理的だったと思われる。

ゴアには公共広場の周りに主要な建物が配されたが、こうした都市建設はポルトガルの首都リスボンをモデルに建設が進められた<sup>52</sup>。またポルトガルがブラジルに建設したサルバドールやリオ・デ・ジャネイロも丘陵地にある不整形な道路を持っている。

#### b) 低地型

ポルトガルと対照的に、オランダは低地を干拓して都市を作ることに長けていた。1619年に開始したバタビア建設では、蛇行するチウルン川を直線化し、その周りに都市を建設している。これは、低地が多いオランダ本国で用いられていた都市建設の手法で、アムステルダムやデルフト（図27）でも適用された都市開発の手法である。バタビアの都市計画はデルフトのそれと類似している。

#### c) 島嶼型

不整形モデルの最後の類型として島嶼型を挙げる。単一あるいは複数の島に都市を形成するもので、都市の拡大が必要になると島の周辺を埋め立てて陸地化し、あるいは島と島を結節したりして対応する。島嶼型の都市都市としてはポルトガル植民地のマカオ、イギリス植民地のボンベイ、同じくボストンなどを挙げることができる。



図26 リスボン（1598年）<sup>53</sup>

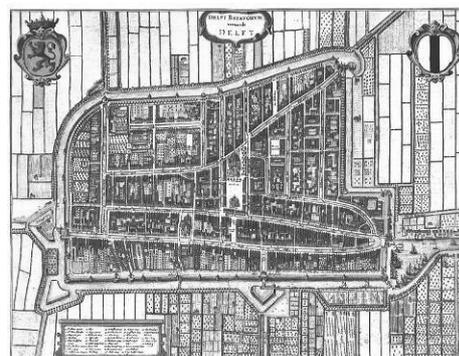
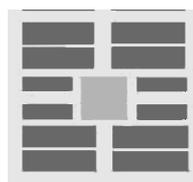


図27 デルフト（1652年）<sup>54</sup>



（分区は中央を十字に道路が交差し、交点は広場となり、南北の4つの居住ブロックと、広場の東西の少し小さい2つの商業ブロックから構成される。）

図28 オグルソープ計画における街区の構成<sup>55</sup>

### (2) グリッド・モデル

不整形モデルと対照的に、格子状（グリッド）に沿って道路を配置し、街区を形成する手法がグリッド・モデルである。

#### a) 正方形型

スペインの植民都市計画の特徴は、ほぼ正方形の街区を並べ、中心部ではそのいくつかを繋げて広場にする。全体的に高密度の市街地を作り、多くの人口を入植させようとした。

こうした都市計画の作法は、すでに1573年に制定された「フェリペ2世の勅令」において明文化されている。この勅令については布野・ラモンの研究<sup>56</sup>に詳しく述べられているが、都市計画の考え方は市の中央にプラサ・マイヨール（中央広場）を置き、道路は中央広場の中央から2本、四隅からそれぞれ2本ずつ主要道路を設け、入植地の所々に小広場を設け、そこに大聖堂、教区教会堂、修道院を設ける、といったものであった。

正方形型のグリッドモデルの適用例としては、スペイン植民地のメキシコ・シティー、リマおよびマニラ・イントラムロスがあり、オランダ植民地のケープタウン、フランス植民地のニューオリンズ、イギリス植民地のフィラデルフィアがあり、独立後のアメリカ合衆国ではシカゴなどの事例がある。

#### b) 長方形型

正方形型のグリッド・モデルを修正して、街区を長方形に変えたのが長方形型のグリッド・モデルである。18世紀初めに計画されたイギリス植民地のジャマイカ・キングストンが長方形型のグリッド・モデルの最初の事例と思われる。その後、1732年のイギリス植民地ジョージアのサバナにおけるオグルソープの計画が長方形型のグリッド・モデルを確立した。

長方形型のグリッド・モデルは、正方形型のグリッドモデルに比べて道路が多く、長方形の街区はより多く道路に接することになる(図28)。19世紀以降、都市の高密化と交通機関の発達が進む中で、長方形型のグリッド・モデルは広く応用されるようになる。

1811年のニューヨークマンハッタン島や1852年のイギリス植民地ラングーンにおける都市計画はこの適用例と考えられる。

### c) グリッド・ダイアゴナル型

グリッド・モデルは格子状の道路によって構成されるが、これに対角線方向の道路を加えたのがグリッド・ダイアゴナル型である。アメリカ合衆国の首都ワシントンDCの計画に見られる。また、イギリス植民地インドの新首都のニューデリー計画、フランス植民地のプノンペンの計画にも適用されている。

## 5 おわりに

本研究では、大航海時代の始まりから20世紀中ごろまでに、ヨーロッパの列強がアフリカ、アジア、アメリカで行った植民地の都市計画について概観した。その中で、地形に沿った不整形な都市計画(不整形モデル)と、格子状やその変形など、幾何学的な配置を試みたグリッド・モデルに整理されることが明らかになった。また後者ではスペインの植民地で適用された正方形型のグリッド・モデルが、フランス、オランダにも適用され、さらにシャープの計画指針が公表されることによって、イギリス植民地や独立後のアメリカ合衆国にも広く適用されまた修正されたグリッド・モデルに変形されたモデルがサバンナのオグルソープ計画で提示され、これがニューヨーク・マンハッタンなどの適用された。植民地における都市計画の潮流を整理した本研究は、今後の個別の都市における都市計画の研究に有益なベースとなる。

<sup>1</sup> 宮本正典・松田素二編、新書アフリカ史、講談社刊、1997年、pp250-251。

<sup>2</sup> 宮本他、前掲書、pp222-223。

<sup>3</sup> 神谷武夫、ゴアの聖堂と修道院(未刊行)。下記サイトより。

[http://www.kamit.jp/02\\_unesco/16\\_goa/goah.htm](http://www.kamit.jp/02_unesco/16_goa/goah.htm)

<sup>4</sup> Plan de Goa, in Histoire générale des voyages, 1750.

<sup>5</sup> Bellin, N. Plan de la ville et du port de Macau, Paris, ca. 1765.

<sup>6</sup> Bahia - plan of the northern and main section of the City of Salvador. From: *Livro que dá razão do Estado do Brasil*

<sup>7</sup> 増田、前掲書、pp74 - 81。

<sup>8</sup> 増田、前掲書、pp145 - 151。

<sup>9</sup> レオナルド・ベネーヴォロ(佐野敬彦他訳)、図説・都市の世界史、相模書房、昭和58年刊。

<sup>10</sup> Plan of the City of the Kings in 1744 which was published in the work of Jorge Juan and Antonio de Ulloa

<sup>11</sup> Map of Old Manila in 1851

<sup>12</sup> ヤン・ピーテルスゾーン・クーン (Jan Pieterszoon Coen, 1587-1629)

は、オランダの軍人、第4代オランダ東インド会社総督である。

<sup>13</sup> 永積昭、オランダ東インド会社、講談社学術文庫、2000年。

<sup>14</sup> 宮本他、前掲書、pp354 - 363。

<sup>15</sup> Kaart. Kaart voorstellende het Kasteel en de Stad Batavia in het jaar 1667

<sup>16</sup> Kaart. Kaart voorstellende het Kasteel en de Stad Batavia in het jaar 1667

<sup>17</sup> Jacques-Nicolas Bellin. Grundriss von dem Fort und der Stadt auf dem Vorgebirge der Guten Hoffnung (Plan of the fort and the town on the promontory of Good Hope), 1750.

<sup>18</sup> エルネスト・エブラール(Ernest Hébrard 1875-1933)はフランス人の建築家、都市計画家。

<sup>19</sup> 1728 map of New Orleans.

<sup>20</sup> Ministère de la Culture, Phnom Penh - Développement urbain et patrimoine, Paris, 1997

<sup>21</sup> トマス・スタンフォード・ラッフルズ (Sir Thomas Stamford Raffles, 1781-1826) はイギリス東インド会社の職員としてアジアに赴き、ジャワ副知事などを歴任し、みずからシンガポールの建設を指示し、総督となる。

<sup>22</sup> マヤ・ジャヤパール、シンガポール 都市の歴史、木下光訳、学芸出版社、1996年。Rev. William Cross, Stamford Raffles - the Man, in W. Makepeace et al. (ed) One Hundred Years of Singapore, Oxford Univ. Press (Rep.), 1991.

<sup>23</sup> ウィリアム・モンゴメリー (Dr. William Montgomerie, 1797 - 1856) は東インド会社付きの外科医。1819年から1842年までにシンガポールに滞在、シンガポール都市計画委員会のメンバーを務めた。この項は一部、Judith Montgomerie に情報提供をいただいた。

<sup>24</sup> アレクサンダー・フレーザー (Lt. Alexander Fraser, 1824-1898) はスコットランド生まれ、ベンガル工兵隊に中尉で入隊、後に将軍となった。

<sup>25</sup> サー・エドウィン・ランドシーア・ラッチェンス (Sir Edwin Landseer Lutyens, 1869 - 1944) はイギリスの建築家。ニューデリーの都市計画のほか、インド総督府(現インド大統領官邸)やインド門の設計も手掛けた。

<sup>26</sup> フレデリック・チャーチ (Frederick Church)。詳細不詳。

<sup>27</sup> S. Mills, Railway to Nowhere - The Building of the Lunatic Line, Nairobi, 2012

<sup>28</sup> An 1893 map of the original islands of Bombay, Constable's Hand Atlas of India, 1893 edition, J.G. Bartholomew, Archibald Constable and Company.

<sup>29</sup> Plan of the Town of Singapore by Lieutenant Philip Jackson, 1822, Displayed in Singapore History Gallery of the National Museum of Singapore.

<sup>30</sup> Calcutta. Published under the superintendence of the Society for the Diffusion of Useful Knowledge. London, published by Chapman & Hall, 186, Strand, Novr. 1842.

(1844), Chapman and Hall, London.

<sup>31</sup> B. P. Pen, A History of Rangoon, American Baptist Mission, Rangoon, 1939に加筆。

<sup>32</sup> *The Town Planning Review* 4 (October 1913): 185-187.

<sup>33</sup> Mills, op.cit.

<sup>34</sup> ウィリアム・ペン (William Penn, 1644-1718) は、イギリス人の実業家、社会思想家。

<sup>35</sup> ロバート・ホーム著(布野修司他監訳)、植えつけられた都市-英国植民都市の形成、京都大学出版会、2001年。

<sup>36</sup> C.M. グリーン(清水博訳)、アメリカ都市発展史、時時通信社、1971年、pp11 - 46。

<sup>37</sup> ジェームズ・エドワード・オグルソープ (James Edward Oglethorpe, 1696-1785) は、イギリスの軍人、政治家、都市計画家。奴隷廃止論者であり、黒人貧困者の解放にもつづいた。

<sup>38</sup> ホーム、前掲書。

<sup>39</sup> ジョン・ゴフ (John Goff) はジャマイカの測量士。詳細不詳。

<sup>40</sup> "A plan of the town of Boston with the intrenchments &c. of His Majesty's forces in 1775, from the observations of Lieut. Page of His Majesty's Corps of Engineers, and from those of other gentlemen."

<sup>41</sup> Map of Boston in 1842

<sup>42</sup> ベネーヴォロ、前掲書。

<sup>43</sup> A 1733 map of Charleston, South Carolina; map is an inset from a larger map of North America.

<sup>44</sup> Hay, Michae, Plan of Kingston, Jamaica, 1745. Filed by Library of Congress.

<sup>45</sup> A plan of the City and Harbour of Savannah, Georgia, United States, "Moss Eng. Co., NY", 1818.

<sup>46</sup> ビエール・ランファン (P. L'Enfant, 1754 - 1825年) は、フランス人の建築家・都市計画家である。

<sup>47</sup> サイモン・デ・ウィット (Simeon De Witt, 1756 - 1834) はアメリカ合衆国の測量士で、1784年から死亡するまでニューヨーク州の測量局長を務めた。

<sup>48</sup> ジェームズ・トンプソン (James "Jud" Thompson, 1789-1873) はアメリカ合衆国の測量士。1821年から合衆国政府の測量士を務め、1831年には遺言書検認裁判所判事を務めた。この項はCarolyn Whitakerによる。

<sup>49</sup> Plan of the City of Washington, March 1792, Andrew Ellicott, revised from Pierre (Peter) Charles L'Enfant, Thackara & Vallance sc., Philadelphia 1792, Filed in Library of Congress.

<sup>50</sup> New York City Council, Remarks of the Commissioners for Laying Out Street and Roads in the City of New York, 1811.

<sup>51</sup> Plan of Chicago made in 1830 by James Thompson. Source: Andreas, Alfred Theodore (1884). History of Chicago. Volu Bahia - plan of the northern and main section of the City of Salvador. From: *Livro que dá razão do Estado do Brasil* I, page 112.

<sup>52</sup> 神谷、前掲書。

<sup>53</sup> 16th-century Engraving of Lisbon, Portugal. In 1598.

<sup>54</sup> "Blaeu's Toonnel der Steden" (Dutch city maps, Edited by Willem and Joan Blaeu), 1652.

<sup>55</sup> Sketch of Savannah's Town Plan showing four of the typical, cellular wards.に加筆。

<sup>56</sup> 布野修司・ホアン・ラモン、グリッド都市-スペイン植民都市の起源、形成、変容、転生、京都大学出版会、2012年。

(2014. 4. 7受付)